

1. 気象概要¹⁾

令和2年（2020年）7月3日から8日にかけて、梅雨前線が中国から九州付近を通って東日本にのびてほとんど停滞した。前線の活動が非常に活発で、西日本や東日本で大雨となり、特に九州では4日から7日は記録的な大雨となった（**図-1.1.1**、**図-1.1.2**）。また、岐阜県周辺では6日から激しい雨が断続的に降り、7日から8日にかけて記録的な大雨となった（**図-1.1.3**）。気象庁は、熊本県、鹿児島県、福岡県、佐賀県、長崎県、岐阜県、長野県の7県に大雨特別警報を発表し、最大級の警戒を呼びかけた。

その後も前線は本州付近に停滞し、西日本から東北地方の広い範囲で雨の降る日が多くなった。特に13日から14日にかけては中国地方を中心に、27日から28日にかけては東北地方を中心に大雨となった。

7月3日から7月31日までの総降水量は、長野県や高知県の多い所で2,000mmを超えたところがあり、九州南部、九州北部地方、東海地方、及び東北地方の多くの地点で、24、48、72時間降水量が観測史上1位の値を超えた（**図-1.1.4**～**図-1.1.8**）。また、旬ごとの値として、7月上旬に全国のアメダス地点で観測した降水量の総和及び1時間降水量50mm以上の発生回数が、共に1982年以降最多となった（**表-1.1.1**、**表-1.1.2**）。

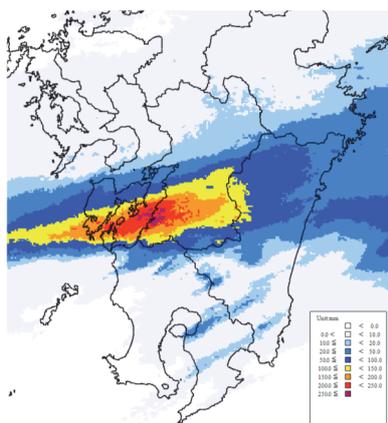


図-1.1.1

3時間降水量(解析雨量)

(7月4日5時)¹⁾

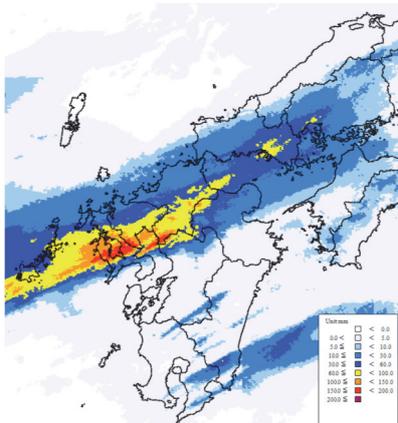


図-1.1.2

3時間降水量(解析雨量)

(7月6日16時)¹⁾

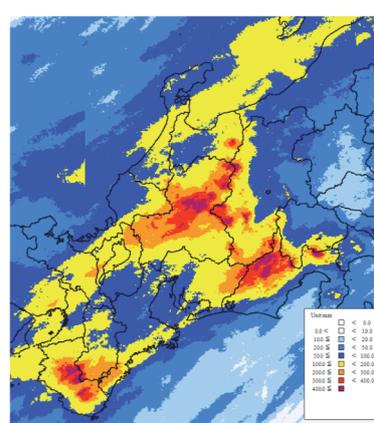


図-1.1.3

48時間降水量(解析雨量)

(7月8日7時)¹⁾

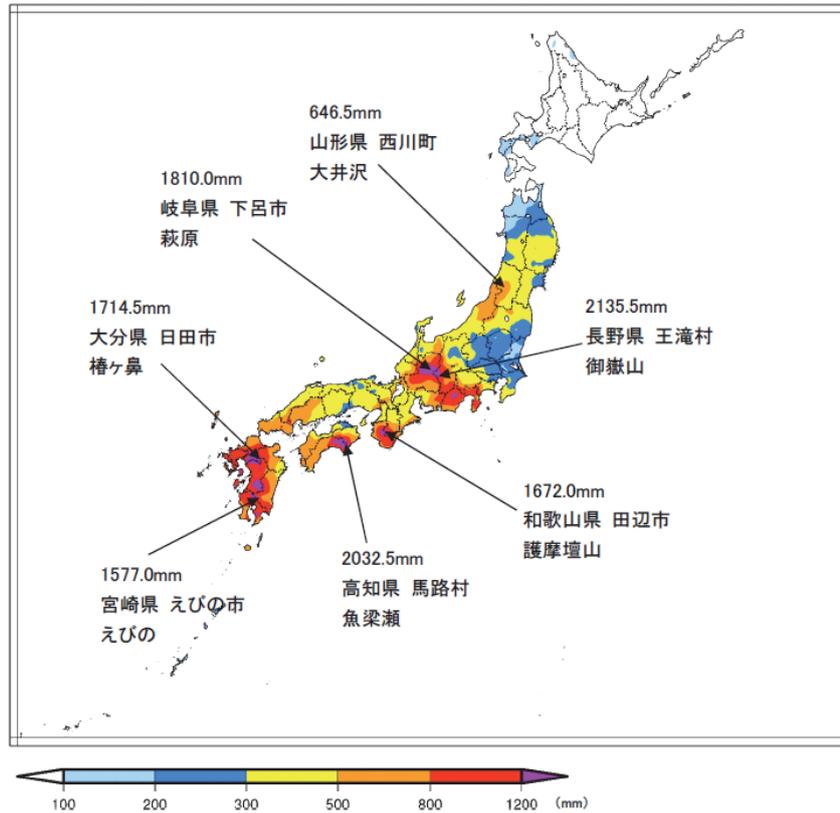


図-1.1.4 期間降水量分布図（7月3日0時～7月31日24時）¹⁾

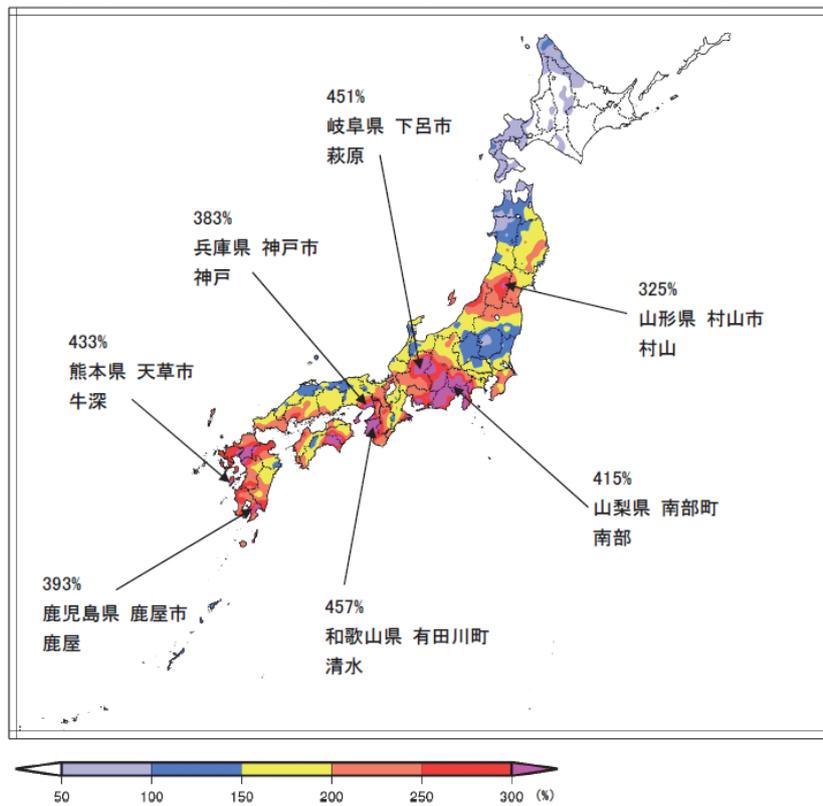


図-1.1.5 期間降水量（7月3日0時～7月31日24時）と月平年値（7月）との比較図¹⁾

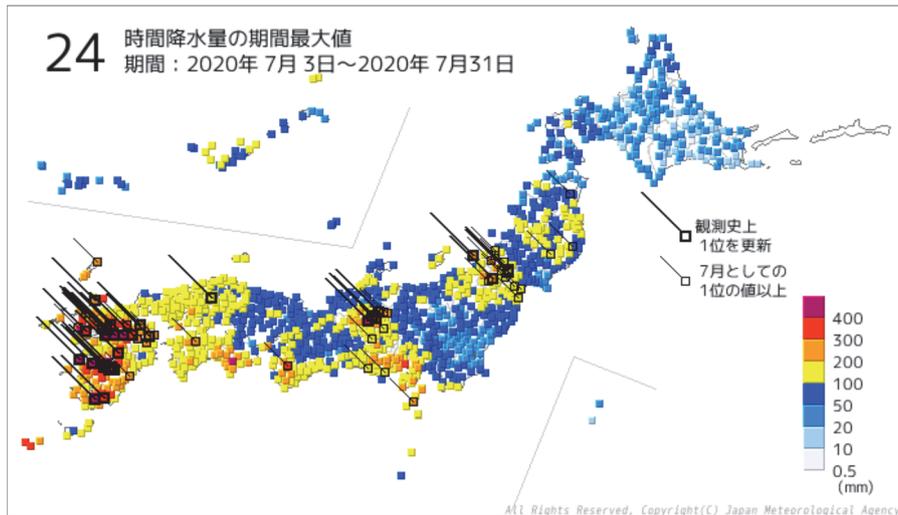


図-1.1.6 24時間降水量の期間最大値の分布図（7月3日0時～7月31日24時）¹⁾

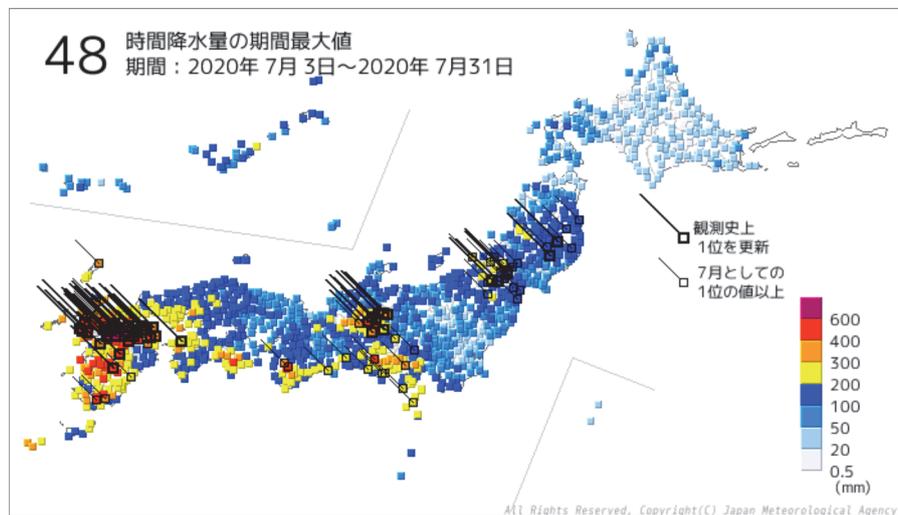


図-1.1.7 48時間降水量の期間最大値の分布図（7月3日0時～7月31日24時）¹⁾

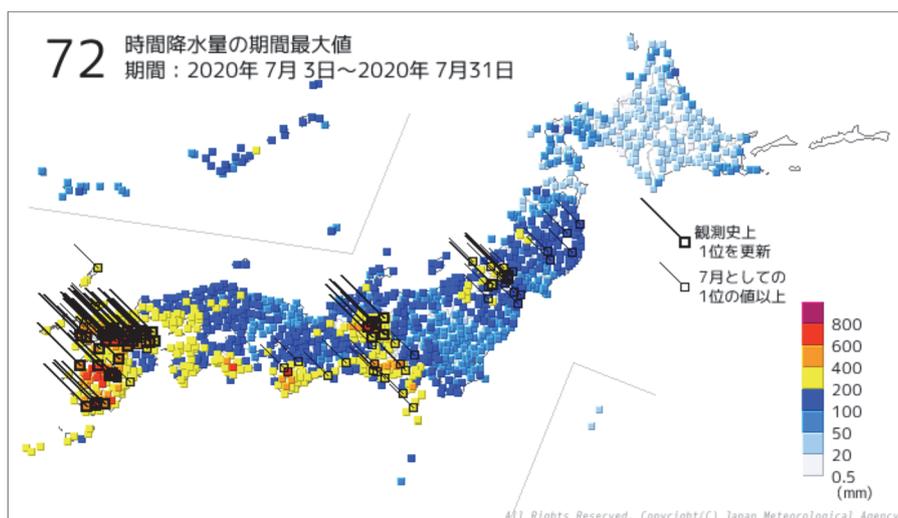


図-1.1.8 72時間降水量の期間最大値の分布図（7月3日0時～7月31日24時）¹⁾

表-1.1.1 降水量の総和（1982年1月上旬～2020年7月上旬）²⁾

順位	年	月	旬	降水量の総和 (mm)	1地点あたり (mm)	備考
1	2020	7	上旬	208,308.0	216.1	令和2年7月豪雨
2	2018	7	上旬	207,526.5	215.3	平成30年7月豪雨
3	1985	6	下旬	199,078.0	206.5	
4	2017	10	下旬	191,532.0	198.7	
5	1990	9	中旬	191,325.0	198.5	
6	2014	8	上旬	173,754.0	180.2	平成26年8月豪雨
7	1999	6	下旬	161,027.5	167.0	
8	1995	7	上旬	156,514.0	162.4	
9	1989	9	上旬	154,334.0	160.1	
10	1983	9	下旬	146,924.0	152.4	

表-1.1.2 1時間降水量50mm以上の発生回数（1982年1月上旬～2020年7月上旬）²⁾

順位	年	月	旬	発生回数	備考
1	2020	7	上旬	82	令和2年7月豪雨
2	2019	10	中旬	69	令和元年東日本台風
3	1993	9	上旬	67	
4	1998	9	下旬	66	
4	2012	7	中旬	66	平成24年7月九州北部豪雨
4	2018	7	上旬	66	平成30年7月豪雨
7	2014	8	上旬	65	平成26年8月豪雨
8	2016	9	中旬	59	
8	2017	9	中旬	59	
10	1990	9	中旬	58	

参考文献

- 1) 気象庁：令和2年7月豪雨 令和2年（2020年）7月3日～7月31日（速報）
https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2020/20200811/jyun_sok_uji20200703-0731.pdf
- 2) 気象庁：「令和2年7月豪雨」の観測記録について
http://www.jma.go.jp/jma/press/2007/15a/heavyrain_20200715.pdf